ボランティア

志津小学校長　辻　太久郎

2020 東京オリンピックが閉幕し、現在はパラリンピックが進行中です。その開催については、様々な意見がありますが、それはそれとして、私個人は、選手たちの頑張る姿に感動の連続でした。また、コロナ禍という困難な状況下で選手たちを支えたボランティアの方々の献身的な取り組みに、海外選手やメディアからも称賛の声が多く寄せられたことも大きな話題でした。

この「ボランティア」を手話で表す場合、二人の人間が横に並んで一緒に歩く姿を両手で表現します。決して「片方がもう片方を支えてあげる・助けてあげる」のではなく、「共に前進する」姿です。パラリンピック競技では、視覚障害の選手とともに走るガイドランナー、水泳ではターンやゴールのタイミングを選手に知らせるタッパー、走り幅跳びでは選手に大声で踏切の位置を伝えるコーラー等の姿を目にします。彼らは、「サポートする人」と言うよりも、まさに選手とともに二人三脚で戦うもう一人の選手です。その姿は、手話の「ボランティア」と重なります。

また、ボランティアは無償・無給が前提ですが、それを経験した人なら誰しも、物や金銭ではない、精神的な報酬を得た実感があるのではないでしょうか。あるボランティア経験者は、「ボランティアは自分を犠牲にすることではない。普通の生活では手に入れることができない何かを得るのだ。だからボランティアは自己開発だ」と言っていました。また、マハトマ・ガンジーもこう言いました「報酬を求めない奉仕は、他人を幸福にするのみならず、我々自身をも幸福にする。」

そんな貴重な体験であるボランティア活動。子どもたちにもいつか体験させたいと考えています。学年が上がるにつれ、できることも多くなってくると思います。その一方で小学生は、登下校時のパトロールの方々をはじめ、多くの地域ボランティアに支えられている存在でもあります。今は、そんな方々の活動の「おかげ様」に気づき、「尊さ」を学び、感謝の気持ちを抱くことが、将来のボランティア精神を育てる素地になると考えています。

ところで、「学年が上がるにつれ～」と申しましたが、では低学年は何もできないのかというと、そうではありません。以下は知人の体験談です。2004 年スマトラ島沖地震が発生、津波などにより多くの犠牲者がでました。私の知人もそこで被災し、薄暗いジャングルの中の避難所で一夜を過ごすこととなりました。避難者は、現地の人々だけでなく様々な国から来た観光客たちでしたので、情報共有もコミュニケーションもままなりません。誰もが沈痛な面持ちで不安な時間を過ごしました。そんなとき、おそらく観光客のお子さんなのでしょう、白人の５、６歳の女の子が、無言でしかし笑顔で、持っていた飲料水を「いかがですか？」と勧めて回ったそうです。その子の両親らしき男女は遠めににこやかに見守っていました。その子がひと通りの人々に声をかけ両親のもとに戻ってきたころには、避難所の空気は明るく落ち着いたものに一変していたそうです。低学年の子どもにしかできないこともあるのです。

緊急事態宣言の下で新学期を迎えるにあたり、保護者の皆様のご心配やご不安は大きいものとお察しいたします。本校といたしましては、文書でお知らせしました通り、職員一丸となってできる限りの感染予防対策に取り組み、子どもたちの安心・安全が確保できるよう努めてまいります。各ご家庭におかれましてもご理解・ご協力の程、よろしくお願いいたします。また、コロナ感染に関わる風評や偏見、いじめや差別は、子どもたちの安全・安心をさらに脅かすものです。このことにつきましても、学校とご家庭とで連携協力し、その防止に努めてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。